

## 令和4年度秋田県立図書館協議会 要旨

- 1 開催日時：令和4年10月26日（水）午後1時30分～午後3時30分
- 2 会場：秋田県立図書館 多目的ホール（3F）
- 3 出席者：会長 高橋 秀晴  
委員 朝野 明子  
〃 荒川 康一  
〃 片岡 俊仁  
〃 工藤 正孝  
〃 小林 光代  
〃 佐々木光雄  
〃 佐藤 博司  
〃 下夕村公子  
〃 竹内 純佳  
〃 土崎 真紀  
〃 渡邊 順子  
事務局 中田 善英 秋田県教育庁生涯学習課課長  
貝田 晴絵 〃 社会教育・読書推進班副主幹  
菅原 敏紀 秋田県立図書館館長  
吉田 孝 〃 副館長  
成田 亮子 〃 主任図書専門員(兼)情報班長  
武田さやか 〃 副主幹(兼)サービス班長  
芳賀奈央子 〃 副主幹(兼)企画・広報班長  
福田 真悦 〃 主査(兼)図書資料班長  
柿崎 幸 〃 副主幹(兼)総務班長

### 4 議事概要

- (1) 開会
- (2) 委員紹介
- (3) 事務局紹介
- (4) 生涯学習課長あいさつ
- (5) 図書館長あいさつ
- (6) 報告

■表記について（●：委員、→事務局）

- ① 令和4年度秋田県立図書館の活動状況について（菅原館長及び副館長から説明）

## ＜入館者数、デジタルアーカイブ、雑誌スポンサー制度、オンライン研修会について＞

●昨年度に比べ、入館者数が増加し、頑張られていると感じた。次の3点、①貸出冊数減少の理由分析、②デジタルアーカイブの一般利用者の閲覧の可否、③雑誌のスポンサー制度の現在のスポンサー数と提供を受けている雑誌数、について教えていただきたい。なお、先日（10/20～10/21）、秋田県生涯学習センターを会場に開催された「北日本図書館連盟研究協議会」は、大変参考になった。会場から遠方の方にとっては、オンライン配信と対面を併用したハイブリッド型の研修会は利便性が高く、感謝している。

→貸出冊数減の理由だが、実際にカウンター業務に従事する者として、日々の感覚も踏まえ、回答する。令和3年度は巣ごもり需要が増えた影響もあり、初めて家族全員で来館し、家族分の図書利用カードを作成した上で、貸出上限数（人数分）の図書をまとめて借りていく、という利用が目立った。今年度はそのような利用が減少した一方、学習のため来館する中高生が増加し、これが入館者数増加の一因となっている。今年度に入り、社会活動が新型コロナウイルス感染症拡大前に徐々に戻りつつあることが、利用者の図書館利用の仕方にも表れていると現場では受け止めている。なお、今後、新規利用者をリピーターとしていかに引き留めていくかは、当館の検討課題の一つである。

→デジタルアーカイブは、一般の利用者も閲覧可能である。また、雑誌スポンサー制度は平成24年度からの取組で、現在は27社から30誌を提供いただいている。また、オンライン配信による研修は、今年度訪問した市町村立図書館からも「オンライン研修会は参加しやすくありがたい。」という声をいただいている。理由は、出張せずとも、希望する職員が職場に居ながら研修会に参加できるため、とのことである。今後もオンラインの活用に努めたい。

## ＜学校への図書の貸出支援について＞

●セット貸出について2点質問したい。高校の利用が令和3年度に比べ、今年度は減少している。県内の約半数の高校が利用している、との報告だったが、今後、未利用校に対してどのようにアプローチしていくのか。また、学校司書が配置された高校と配置のない高校では、利用に差が見られるものか。

→現在、学校現場では生徒が1人1台タブレット端末を使用した学習に取り組んでいる。総合的な探究の時間では、紙資料よりも、タブレット端末を使った情報収集やグループワークなどの学習機会が増えているようだ。ただ、タブレット端末で得られる情報は、断片的で簡略的なものが多く、精度も低い。その点からも「探究」を進める上で、客観的なデータや多様な視点の提示に富んだ図書資料は欠かせない。

秋田高校では、総合的な探究活動において参考としたい図書資料を生徒からリクエストを募り、学校図書館に所蔵がない図書資料は当館から借りて生徒に手渡し、という取組を行っている。このような形での学校支援の流れは今後、県内の他の高校にも広がっていくと期待しており、セット貸出の利用校が増える余地は大いにある。また、校長会等の場も利用し、当館の活用事例などについても提案していきたい。

→当館としては、毎年度図書資料購入費の内、概ね350万円程を学校向けのセット資料の購入に充て、50セット程度を順次、追加整備している。なお、学校司書の配置の有無による利用の違いであるが、学校司書の配置された高校の方が積極的に利用しているとの印象をもっている。

### <学校図書館訪問について>

●学校図書館訪問について質問したい。令和3年度は、特別支援学校を含む延べ7校に訪問したとのことだが、今年度は0校のようだ。本校の職員に確認したところ、生涯学習課でも学校図書館活性化支援として学校訪問を実施しており、本校では目的や利用方法に鑑み、今年度は生涯学習課の事業を活用したという話だった。どちらも学校訪問ということだが、事業としてどのように棲み分けを行っているのか、教えていただきたい。

→生涯学習課の学校図書館活性化支援と県立図書館の学校図書館訪問については、その違いが分かりづらいという声をいただくことがある。県立図書館による学校訪問では、「図書館司書」が図書館の運営や図書整備等についてアドバイスや支援を行っている。一方、生涯学習課による学校訪問では、「読書活動指導監」というもともと教員である職員が、授業と連携した学校図書館の活用方法などについてアドバイスや支援を行っている。この点が一番大きな違いである。

●生涯学習課による学校訪問は、図書館そのものの運営というよりも、教育的要素が入っているということで理解した。

→当館による学校図書館訪問の活用例として最も分かりやすいものが、校舎新築の場合である。私も実際に図書館全体のレイアウトや図書の並べ方等について県立図書館の職員からレクチャーを受けた経験がある。また、当館では学校図書館活性化に向けた、図書館のレイアウト一新等の要望についても、随時、アドバイスを行っている。

●ただ今説明があったこの違いについて、学校現場はどの程度理解しているのか。

→周知に努めているが、全ての学校に情報が行き届いていない可能性もある。当館及び生涯学習課が協力し、更なる周知に努めていきたい。

●情報が行き渡り、学校現場において、混乱なく、よりニーズに適した支援を選択できるようお願いしたい。

## ② 図書館利用者アンケート結果について（芳賀企画・広報班長が説明）

### <アンケート結果の生かし方、マルチメディアデイジー、インターンシップの受入、学校への図書貸出支援について>

●自由記述を読んだが、こんなに多くの方が意見を寄せてくれたことはとても幸せなことだ。たくさんの県民が関心をもって、貴館に対し、良いところ、改善を期待したいところを率直に伝えている。職員一人一人の頑張りがアンケートに表れた結果だろう。そこで、質問に対する回答方法、職員間での情報共有など、アンケート結果の生かし方についてお尋ねしたい。また、「周知が利用に繋がっていない」という説明があったが、今後、実際の利用に繋げていくための効果的な方策など、是非、現場で同じ悩みをもつ者として他の委員の意見も伺いたい。また、マルチメディアデイジー（※）の利用状況と特別支援学校生を含めた、インターンシップの受入状況についても情報提供をお願いします。

（※）マルチメディアデイジーとは、パソコンやタブレット端末で目と耳から読書を楽しむことができる電子図書の国際規格で、音声と一緒に文字が表示されるデジタル録音図書のこと。

→アンケート結果については、職員会議や全員回覧などを通じ、職員全員で共有している。また、日々の様々な要望についても、可能なものから改善に努めている。しかし、中には、立地環境に伴う制約や予算面の都合でなかなか対応が困難な要望もある。それらについては生涯学習課とも情報を共有し、少しでも改善に繋がるよう、関係機関への働き掛けや要請などにも努めている。ただ、当館は本場所への移転から間もなく30年を迎え、近年新設された施設と同等の最新機能に応えることは厳しい。その点は、利用者の皆さんへの丁寧な説明に努め、引き続き、理解を求めていきたい。

→当館所蔵のマルチメディアデイジーについては、伊藤忠記念財団から寄贈された「わいわい文庫」がある。わいわい文庫は、障がいの有無に関わらず誰でも利用可能な青い盤面のもの（通称「Ver. BLUE」）と、障がいのある方を対象とした白い盤面のもので構成されている。昨年6月から貸出を開始し、昨年度（R3.6月～R4.3月）の貸出実績は、青い盤面のものが4回、白い盤面のものは0回であった。今年度（R4.4月～9月）の貸出実績は、青い盤面のものが3回、白い盤面のものは0回である。なお、視覚障がい者の区分で利用者登録はこれまでいなかったが、昨日（10/25）1名の登録があったところである。

→インターンシップは受け入れており、今年度は、障がいをもつ生徒や学生の参加はなかった。

→当館が提供している様々なサービスに対する認知度が前回アンケート実施時よりも低くなったことについては、正直、驚いた。各班ごとに該当する業務に係る要望等への対応を前向きに検討し、本アンケートの目的であるサービス向上に繋げていきたい。

●関連の質問となるが、マルチメディアデジタイズ図書、相互貸借、学校貸出の取組の更なる周知に向け、具体的な方策があれば伺いたい。

→まずは、館内の掲示板や図書館だより、当館のウェブサイト、Facebookなどを通じて今まで以上に積極的に情報発信を行う。また、実際のサービスの利用者を対象とした、休館日を利用した図書館見学会などのアプローチ方法も検討してみたい。なお、市町村立図書館を介した県立図書館の図書の貸出等に関しては、市町村立図書館サイドからも地域住民の皆さんへ情報発信していただけるよう、市町村立図書館への訪問等の機会を捉え、理解と協力を求めていきたい。

●昨年度、「学校への図書の貸出支援」を利用した、特別支援学校の生徒から寄せられた感想文に接する機会があり、非常に感動したことを覚えている。素晴らしい取組であり、認知度向上に努めていただきたい。

#### ＜来館者が多い利用曜日、時間帯について＞

●来館者アンケートという性格上、「市町村図書館を経由した県立図書館の資料貸出」や「学校への図書の貸出支援」など、実際のサービス利用者と回答者が異なる質問について認知度が低いのは、ある意味、致し方ない。重要なのは、実際のサービス対象者である市町村立図書館や学校などの要望を的確に汲み上げ、引き続き働き掛けを行っていくことである。また、駐車場が混雑しているという意見も目立つ。次回、アンケート実施時に、主な利用時間帯や曜日を質問項目に追加することで、今後の混雑対策の検証に繋がるのではないかと。なお、この点について、既に事務局で把握していることがあれば教えて欲しい。

→やはり圧倒的に土日の来館者数が多い。秋田市立図書館明德館の休館日である月曜日や、休館日の翌日の木曜日の利用も目立つ。なお、休館日を水曜日に設定したのは、実際、来館者数を一定期間カウントし、結果、最も少ないのが水曜日だった、との経緯がある。利用時間帯については、午前中は高齢者の方が、夕方は仕事帰りの方の利用が多く、年齢層によって利用時間帯が異なっている。

### <分かりやすい表記、表示について>

●利用を増やすためには、分かりやすい用語を使用することが重要ではないか。回答者の中にも「レファレンスカウンターという言葉が分かりにくい」という意見があった。高齢者や子どもにとって片仮名の用語は分かりにくい。幅広い層が分かりやすい表記へと変更することで、より多くの利用者に愛される図書館になるのではないか。発達障がいなど、配慮を要する児童の中には、文字が分かりやすい児童も、絵や図の方が分かりやすい児童もいる。貴館でも文字にプラスして絵や図を併用するなど、誰もが分かりやすい表記に向けた環境整備に取り組んでみてはいかがか。

→実際、「レファレンス」という用語が分かりづらいという声も聞く。図書館によってはカウンターに「？」や「相談コーナー」等の掲示をしているところもある。当館でもできるだけピクトサインを取り入れるようにしているが、委員の意見を参考に、館内の表記について更に工夫していきたい。

### <アンケート結果の分析について>

●アンケート結果を見ると、非常に評価が高い。総じて図書館としてよく機能しており、職員の努力や工夫がよく働いていることが分かる。反面、アンケート結果の分析が十分とは言えない。なぜ増えたのか、減ったのかという分析を的確に行い、次にどのようなアクションに繋がるかを前向きに検討してほしい。それが示されることで、さらに説明に説得力が増し、貴館の推進力にも繋がっていくであろう。

#### (7) 協議

##### ① 秋田県立図書館への要望・提言等について

### <探究活動における図書の役割などについて>

●学校推薦型等で大学に入学する生徒の増加や総合的な探究の時間が授業カリキュラムに組み込まれたことで、学校への図書のセット貸出が果たす役割はますます重要だ。意外にも貸出が伸び悩んでおり、その一因がタブレット端末の普及ではないか、という話もあった。デジタル端末と図書資料はいずれも一長一短があり、両者の性格を踏まえた上での活用が大切だ。貴館でもタブレット端末に負けないよう、セットの分野や種類、構成等を見直し、セットの再編成を行う等、工夫を凝らしたサービス提供に向けた検証を是非お願いしたい。

●探究活動はこれからの目玉になる。インターネットは、誰もが自由に情報を発信したり受信することができる開かれた空間、という性格上、情報の真偽や質は担保されていない。このため、生徒自身が収集した情報の是非を見極める目をもつ必要がある。図書資料は、作者や編集者などの多くの人の目による校正作業を経ており、誤りが少なく、また、複層的な情報提示及びその比較検証の過程を読者が辿ること

で、自ら考え、判断する際の手助けとなる。雑多な情報から確かな情報を得るためには、図書資料は欠くことのできないアイテムであり、デジタル端末のみで完結する探究活動は危うい。先の意見は傾聴に値する。

#### <学校への図書のセット貸出等について>

●学校への図書のセット貸出について発言したい。総合的な探究の時間に力が入れているのは肌で感じるが、概してタブレット端末の利用のみで完結する傾向が強い。学校によっては、図書室の利用がないケースもあり、生徒の声が直に学校司書には届かない。セット貸出図書は、その分野を広範に網羅した内容構成である反面、一つのことを深めるための内容としては乏しい。現場では、セット図書の中から鍵となる図書を探し出し、そこから他の図書の利用にどう上手く紐づけていけるか模索しているのが実情だ。また、学校司書は全県で14名の配置であり、学校司書の不在により学校図書館が「開かずの間」になっている場合もある。これではセット貸出の利用促進もおぼつかない。

●私も以前学校図書館で司書をしており、委員の悩みがよく分かる。学校の方針が学校図書室運営に大きく影響する。負けないで頑張りたい。学校への図書のセット貸出サービスが始まった当初、利用に積極的な学校は少なかった。しかし、今ではたくさんのセット図書が整備され、リクエストすれば必要な図書が届き、子どもたちがすぐに手に取れる環境にある。県立図書館はいつも市町村立図書館を応援してくれている。学校へのセット貸出を知らない人が59%にも上った、という結果には驚いたが、学校関係者のみを対象としたアンケートではなかったため、やむを得ない。是非、学校の先生方に向け、こんな便利なサービスがあるということを頑張ってお知らせしたい。

●学校へのセット貸出については、タブレット端末の普及とともに工夫の余地が出てきているということであろう。現行のセット貸出にはよい面もあれば、時代にそぐわない面が出てきていることも事実。貴館として、どのような工夫ができるか、今後の課題として前向きに捉えてほしい。教育現場を取り巻く環境の変化を踏まえ、セット貸出をより有効に機能させていくための方策を考察いただきたい。

#### <QRコードを活用した情報発信について>

●先ほど、図書館サービス周知の話題があったが、大学生へのアプローチについて発言したい。県立図書館からFacebookやYouTubeを介した広報について説明があったが、秋田大学の学生の様子を見ると、廊下の掲示物等を通して情報を得る傾向があると感じている。FacebookやYouTubeのデジタルの入口として、あえてアナログであるポスター等にQRコードを掲載することで、図書館の利用を喚起できるのではないかと。

●大学生が古典的なポスターやチラシを入口にしているということは、盲点だったかもしれない。そこにQRコードを入れ込むことで新しいツールへ誘導する機能を追加するのが有効との提案である。貴館で既に取り組んでいることがあれば、教えていただきたい。

→YouTubeチャンネルで公開する動画案内のチラシを作成し、チラシ中に動画へ誘導するためのQRコードを掲載している（動画は10/27公開）。また、新規利用者向けの利用案内リーフレットにも、当館ウェブサイトへのアクセスが直に可能なQRコードを掲載している。現役の大学生である委員からこのような意見をいただき、私たちが心強く感じた。今後も積極的に取り入れていきたい。

#### <大型絵本の貸出について>

●貴館には多くの大型絵本があるが、実際に貸出を受けられるのは、読み聞かせを行っているグループのみで、貸出期間も6日間と短い。私が読書相談を受ける際は、より貸出期間が長い（15日以内）秋田県子ども読書支援センターの利用を案内することもある。貴館での貸出期間が長くなれば、もっと利用が増えるのではないか。また、大型絵本は貴館の蔵書検索システムでは「貸出禁止」と表示される。読み聞かせグループであれば借りられることが分かる表示への変更を検討いただきたい。

→今後、検討していきたい。

#### <電子書籍について>

●学校へのセット貸出に関連し、電子書籍を子どもたちがタブレット端末で読むというサービスも展開されつつある。貴館でも検討してみてはどうか。

→授業での電子書籍の利用は大学が最も進んでいるが、著作権法上、オンライン授業での電子書籍の利用は原則禁止、アクセス数にも制限がある等、制約も多い。授業での利用のあり方は、今後の課題である。図書館においても電子書籍の取扱いについては今後、様々な選択肢の中から利用者にとって本当に使い勝手のよいものを慎重に見極めていく必要があると考えている。

#### <地域内ネットワーク、幼少期の図書館体験について>

●地域ネットワークの充実という視点から発言したい。八郎潟町には町立図書館があり、年間45,000人程度が利用している。利用登録者数は約3,400人程度で、そのうち八郎潟町民が約半数の1,600人程、残りは五城目町、井川町、大潟村と周辺の住民である。八郎潟町民以外の登録者数が多い理由を聞くと、周辺の町村には図書室はあるが図書館がないため、とのことであった。例えば、八郎潟町立図書館をハブとした、周辺の図書室との貸出ネットワークが構築された「地域拠点図書館」という位置付けがあってもよいのではないか。今後は、是非、地域内ネットワークの

充実を視野に入れた取組も模索いただきたい。また、こども園に関わる者として、子どもたちの心に図書館の原体験を残すことが重要だと考え、町の図書室に子どもたちを定期的にバスで連れて行くなどの取組を行っている。子どもたちがきれいに揃えられた図書に触れ、その空間に身をおくことで、「図書館（室）」という場所があるということを心のどこかに留めて欲しいと願っている。

#### <共同駐車場について>

●共同駐車場だが、山王方面から臨海方面に向かって走ってくると、三車線で対向車が多く、右折して入るのが怖い、という声がある。信号機の設置は難しいと思うが、何か工夫ができないか。駐車台数が少ない、との意見もある中で、共同駐車場の利用に繋がらないのはもったいない。

●生涯学習課をはじめ、今後の検討事項の一つとしていただきたい。

#### ② その他

図書館の各種イベントについて吉田副館長から案内を行った。

(8) 館内見学

(9) 閉会